

## 狂言師・野村裕基

野村裕基君が狂言師として誕生したのは3歳の時。狂言の名作「靱猿」の子猿の役で初舞台を踏んだ。猿曳き（猿使い）が猿を連れて野原を歩いてゆくと横暴な大名に出会い、毛並みの良いその猿の毛皮をくれと難題を吹きかけられる。断れば射殺すぞと脅されて猿曳きは猿を殺そうとするが、何も知らない子猿はあどけなく猿曳きを見つめ…。この愁嘆場ののち大名ももらい泣きして和解となり、後半は猿曳きの謡う猿歌に合わせて子猿がリズムカルに舞って大団円。前半の緊迫と後半の祝祭で綴られる「靱猿」の40分余りを子猿は無心に猿の演技をし、舞いを舞う。着ぐるみを着、子猿の面をつけての40分は相当にハードで、狂言師となる第一歩の舞台とされている。

野村裕基君の「靱猿」の稽古始めから初舞台まではNHKのDVD「小さな狂言師の誕生」に記録されている。まだ右手も左手も区別がつかない裕基君。困る祖父万作師。厳しく叱る父萬斎師。泣く裕基君。大学での授業で何度もこの映像を鑑賞し、

稽古始めの裕基君が初舞台までの1年間に顔がまったく変わっていることに気づいた。「年少さん」の顔が狂言師の顔になっていく。

狂言の稽古メソッドのすごさである。有無を言わず一対一。祖父も父も、幼児裕基君も真剣勝負。野村家の稽古場はすごい。

高校をイギリスの学校で過ごした裕基君は帰国して18歳で次なる課題「三番叟」に挑む。祖父、父の最も得意とする能狂言の原点の舞。フランス、ピエールカルダン劇場での三代の「三番叟」競演はなんと裕基君が一番人気があったとか。日本でもWOWOWで放映された。

そして今年、20歳で「奈須与市語」に挑んだ。与市と義経、後藤兵衛、源平の軍兵たち、扇を掲げる平家の美少女、を語り分ける。生死的に向かう与市、そこには狂言師としての未来の成否がかかっている。裕基君の「奈須与市語」は微塵も妥協のない正確さで、しかもそれぞれの人物の人間味がにじみ出ているように感じた。ああ、役者なんだなと思った。

次は狂言修行の最終関門「釣狐」が控えている。この関門を出た祐基君をもう裕基君とは呼べないだろうな。



藤岡道子

能狂言研究者

1947年茨城県生まれ。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修了。京都聖母女子学院短期大学名誉教授。大学時代より野村万作に師事。専門は能狂言研究。著作に「野村梅子談笑録」（『美女のイメージ』所収。万作が母堂梅子の聞きとりをしたものを藤岡が女性史の視点からまとめたもの）、『岡家本江戸初期能型付』（京都の協方の名家、岡家伝来の貴重な能型付の翻刻と解説）等。近年は狂言古図の研究に取り組む。

### CLIP

舞台芸術研究センター周辺で起こる、ホットな話題をお伝えします。

## 開学30周年記念事業

### 猿翁アーカイブにみる三代目市川猿之助の世界 第五回フォーラム〈感動〉

#### シークレットゲストに市川猿弥さんが登場！

三代目市川猿之助（二代目猿翁）さんから京都芸術大学（旧名称：京都造形芸術大学）に寄贈いただいた貴重な歌舞伎関係資料をもとに、三代目猿之助の軌跡をたどるフォーラムの5回目（2020年10月17日（土）、春秋座にて開催されました。今回のテーマ「感動」について横内謙介（脚本家、演出家）さん、石川耕士（脚本家、演出家）さんの講演が行われた後、シークレットゲストとして歌舞伎俳優の市川猿弥さんが舞台上に登場。満場の拍手で迎えられました。

